

20100907\_銀座農業政策塾\_議事録「水田の有効活用と環境保全型農業」

日 時：2010年9月7日（火）19:00－21:00

場 所：東京・銀座 銀座会議室

テーマ：「水田の有効活用と環境保全型農業」

発表者：蔦谷栄一氏（農林中金総合研究所特別理事）

参加者：参加者 21人（発表者除く）

（農業生産法人役員、会社員、経営コンサル、環境コンサル、FP、公務員、NPO法人理事長、行政書士、司法書士など）

塾長から開会挨拶、銀座農業政策塾の趣旨、今回ミーティング趣旨  
→資料「戦略研概要」

参加者からのコメント：

- ・今年から畑デビュー。今夏の猛暑はえらいことでした。
- ・埼玉で農業生産法人設立のサポートをしています。

発表：「水田の有効活用と環境保全型農業」

1. 先進国では最低の食料自給率

- ・我が国の食料自給率の推移。生産額ベースや、カロリーベースなど様々な種類がある
- ・欧米。カロリーベースでの食料自給率高い
- ・英国。第二次世界大戦以前は、植民地から食料を調達。工業製品輸出で稼いだ外貨で輸入。戦後、食料安全保障に取組み、食料自給率が上昇
- ・日本の米。人が食べるものとして生産（主食米）。これに対し、欧米では、小麦など穀物は人と家畜が食べるものとして生産  
→このことから、欧米ではカロリーベースの食料自給率が高くなる
- ・なお、穀物中心の生産を行ない、野菜を輸入している英国の食料自給率は、カロリーベースだと約70%だが、生産額ベースだと約40%となる。

2. 約4割に及ぶ水田での米生産調整

- ・日本の農業支援は水田に偏重
- ・カロリーベースの食料自給率40%の一方で、米（水田）は余剰
- ・昭和40年代から米の生産調整が始まる  
→その当時から、飼料米化の議論、取組みがあった  
→しかし、主食米と飼料米では価格の開きがあり過ぎた（輸入穀物があまりに安価）  
→主食米と飼料米の流通ルートをいかに分けるかも問題となった
- ・食料・農業・農村基本法では、農業の多面的機能を明記  
また、基本計画では、カロリーベースだけでなく金額ベースの食料自給率目標を設定

3. 水田を有効活用して米粉原料米、飼料米、飼料イネ等の生産
  - ・米粉原料米は、パン等に製品化し商業ベースに乗るまで時間がかかった  
小麦は水になじみやすく成型は容易であるが、米粉だとバラバラ、ボロボロになる。  
成型難しい  
現在は改良されてきている
  - ・蔦谷氏は、水田の畜産的利用を提唱。飼料イネ、飼料米、米粉原料米そして牛等の  
水田放牧
  - ・生産調整における添削奨励の一環として、2000年、飼料イネに転作助成金が出るようになる
  - ・なお、飼料米は、米の粒としての機能。飼料イネは、子実とあわせて葉と茎も発酵させて牧草に近い機能（ホールクロップサイレージ）。活用例としては、飼料米は山形の米育ち豚、飼料イネは南九州
  - ・牛に、穀物（濃厚飼料）を与えると肉にサシが入る。草（粗飼料）を与えると肉は赤身になる
  - ・2009年の民主党政権への交代しながらも、飼料米、飼料イネへの注目継続  
→飼料米、飼料イネは、水田自給力向上対策の助成対象となる  
→（政権の不安定から）この補償がいつまで続くか、財源は不足しないのか  
また、単年度ベースの補償制度に対し、農家は不安を抱えている
4. 環境保全型農業への取組みの現状
  - ・農薬、化学肥料を使用しない、あるいは使用を減らす実態をいかに作るか
5. 水田での環境保全型農業への取組み事例
  - ・NPO生物多様性支援センターの「田んぼ」DVDを視聴  
→水田の多面的機能（灌漑、涵養、生態系）  
→持続可能な農業の必要性（多様な生き物がいる水田）
  - ・そして、水田は水田として使用する
6. まとめ
  - ・米国。CSAなど「消費者が生産者を守る」活動  
→消費者が生産者に前払いを行い、適正価格を支払う
  - ・日本においても、消費者と生産者のコミュニケーション構築が必要  
→持続可能な農業のコストを消費者も負担する  
→農村、集落の相互扶助に消費者（都市住民）も参加する

質疑応答／意見交換：

○1：茨城県の農業生産法人では、40ヘクタールの農地のうち、12ヘクタールを飼料米の生産に振り分けた。大規模化ができれば、大型コンバインの使用など、田んぼの整備も容易になる。効率化も進む  
飼料米の生産増加は、主食米の価格へも好影響を与えるのではないかと考えている

Q1：環境保全型農業に関連して。有機農業は、日本で何故進んでいないのでしょうか？

A1：日本と欧米の気候の差が大きい。温暖湿潤の日本において、有機農業はハードルが高い。また、有機JASの認証などのコストに対するパフォーマンスの折り合いが取れていない。さらに、有機JASなどへの消費者の認知も低い

Q2：飼料イネにつき、肉のサシへの影響はないのでしょうか？

A2：粗飼料を多給すれば赤身となりサシは少なくなる。今のところ、多くは濃厚飼料と混合して牛に食べさせたりしているので、サシへの影響はあまりないのではないかと。また、乳牛への粗飼料供与についても、いろいろな研究が進んでいる

Q3：飼料米の生産と環境保全型農業の両立はできるのでしょうか？

A3：一般的には小規模農業のほうが手作業部分は多く環境にやさしいと受け取られているが、大規模農家のほうが、環境負荷を掛けない農業（減農薬、減化学肥料）を行っているというデータもある。大量生産における効率化を考えれば、農薬や化学肥料の使用の適正利用は、コスト低下にもつながる。

以上。